

自己点検・評価報告書

令和4年度 数理・データ科学・AI 教育プログラム

1 評価体制について

鳴門教育大学・学校教育学部教務委員会は、「教育課程の編成及びその実施」、「内部質保証」に関する事項を取り扱うこととしており、本プログラムの推進について議論・評価を行う。

2 学内からの視点

2.1 プログラムの履修・修得状況

令和4年度は全1年次生111名が履修し、108名が修了した。本学の収容定員が400名であることから、令和3年度の修了生114名と合わせて履修率は222名 / 400名 = 55.5%である。

2.2 学修成果・学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

本プログラムを構成する講義「基礎情報教育」において、「数理・データ科学・AI教育プログラム」に関する主要パートが終了した時点で、学生の自由記述による授業評価アンケートを実施した。まず図1は「講義の良かった点」についてのコメントから生成した共起ネットワークである。「データ分析」活動や「問を立てる」活動などが良かった点として挙げられており、さらに「今後役立つ・使える」という意見があることが分かる。これらの意見は、まさに本講義を通して伝えたい事柄であり、講義の目的はある程度達成されていると判断できる。

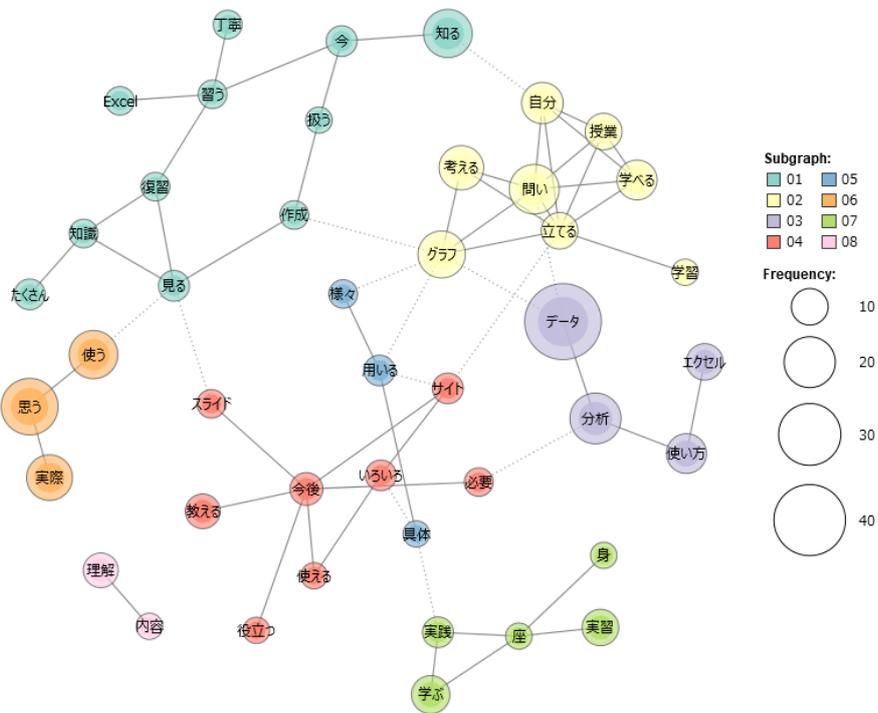


図1 講義の良かった点: 受講生に対する自由記述アンケートを基に作成。

4 改善・進化に向けた取組

4.1 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムを構成する授業科目「基礎情報教育」の授業担当者間で、学生アンケートや学校現場からの意見を共有し、学校教育の観点から「数理・データサイエンス・AI等を学ぶことの意義」を理解できるよう、講義内容と実施方法の見直しを検討した。特に、教育関係のデータをより多く取り入れるべきとの意見があり、次年度以降、教育関係データの割合を増やすことを検討している。

4.2 内容・水準を維持・向上しつつ、「分かりやすい」授業とすること

内容・水準を維持・向上しつつ「分かりやすい」授業とするために、より身近に感じられたり、将来教員になった際に活用できると感じられるような内容に改善することを検討してきた。そのために、香川大学が主催する「数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム四国ブロックシンポジウム」に参加するなど、情報収集に努めてきた。しかし、産業界からの視点や意見についての情報収集はいまだ不十分であり、次年度以降さらに改善を進めたい。